

聖カール・ボロメウス霊園教会

総合芸術

1899年マックス・ヘーゲレ設計

1908-1911年施工

壮大なこの教会建築では、時間と永遠を背景に「無常」や「死と命」に関する主題が綿密に取り扱われています。

ウィーンの代表的な建築家であったマックス・ヘーゲレは、21名の芸術家の協力を得て、芸術史上比類無き傑作となった総合芸術を生み出しました。

当時の建築概念と芸術概念（ユージェントシュティール）、古いキリスト教建築（ウィーンのカールス教会、ローマの聖ペトロ大聖堂、イスタンブールのアヤソフィア）、神殿や古代エジプトのファラオの墳墓を、ヘーゲレはこの霊園教会に結びつけています。後者が画題となったのは、古代エジプトでは死後にも続く命の存在が信じられていたからです。

「死の海」（中央墓地は当時ヨーロッパで一番大きな霊園）の真ん中に位置するこの**壮大な教会建築**は、死よりも強い神の全能を表そうとしたもので、中央墓地全体の頂点となっています。

外から正面より左側奥の上に見える独特の形をしたエジプト十字（アंक）は永遠を表す一つのしるしです。

数字の代わりに「TEMPUS FUGIT」（時は過ぎ行く）と記された塔の時計は無常を想起させます。

霊園教会は中央墓地のある地面より3メートル高い所に建てられた本堂となる上の教会と、棺の安置所として使われている地下聖堂からできています。教会の平面図は円と十字の形をしており、永遠と救いを示しています。

大きな三つの階段（教会の正面と両サイドにあります）

これは神学的に見ると（聖書を通して、また天地創造や世界の善と美を黙想することを通して）「高く」神へと導く道を示唆しています。

実用的には葬儀の花輪を飾ったり、参列者が多くて教会に入れず外にいる人々のために、亡くなった人の棺とそれに続く葬列が見れる舞台としての役割も果たします。

前室は弔問記帳や献花用のお花を置く場所として使用されます。

教会内部は広々としており、大勢の人が葬儀に参列できるように造られています。

教会座席の間にある広い中央通路は棺を置く場所になります。

祭壇空間は葬儀の様子がすべての人に見えるように、高い位置に設けられています。

教会内部にある4カ所の墓碑銘室は、オーストリア帝冠領で埋葬された人々の銘板を取り付けるために構想されました。しかし、皇帝フランツ・ヨーゼフの命を受けて、亡くなった皇后エリザベートのレリーフが設置されると、銘板に名前を入れることは遠慮され、当初の計画通りにはいきませんでした。

祭壇の裏側にある香部屋（祭服や祭具が保管されており、ミサなどのお祈りをする準備のための部屋）の洗礼盤は、永遠の命の始まりを示唆しています。

（こちらは一般公開されておられません。）

地下聖堂（本堂からは中央右側奥のエレベーターを使って、外からは教会の左側の入り口から行くことができます）とその左右にある納骨堂は、多くの棺を安置するためにあります。

教会内の聖画は神の人間に対する救済史（前室にあるアダムとエバのレリーフから本堂正面の上部に描かれた扇形をした最後の審判の絵に至まで）を表しています。

天井ドームに描き出された星空は、神の現存を表すエジプトのシンボルです。

中央祭壇の上の絵画は聖書とは関係のない絵を用いた珍しい方法で、永遠の命についての聖書のメッセージを現実的に示しています。

左側の絵

ここには二人の天使が描かれています。ひざまずいている天使は右の手に砂時計（数字盤にTEMPUS FUGITと書かれている塔の時計のペア）を持っています。砂時計は無常、流れ去る時のシンボルです。

天使の左側には地面に大鎌が描かれていますが、これは死（大鎌を持った骸骨の姿をした死神はよく知られている）のシンボルです。

人間にとって与えられた時が終わると、死が訪れ、死んで、－ 二人の天使との間にある開いた墓に － 葬られます。

人間の体の中で最も長く残るものは頭骸骨です。

立っている天使は消えかけの松明（よく見ると、その先には消えんばかりの赤い火とほのかに立ちのぼる煙が見えます）を手に持っています。それは来るべきメシアについて記されている預言者イザヤの本文（イザヤ42章1-4節、マタイ3章17節参照）と「彼は正義を勝利に導くまで、傷ついた葦を折ることなく、ほのかに残る灯心を消さない」とあるマタイ12章20節を背景にしたものです。この絵は死によって終わったように見える命が、神のもとでは消えないことを表しています。

中央の絵

この絵は左側の絵の続きを示しています。人生の時が終わった人間は死んで、亡がらが葬られ、その頭蓋骨は最も長く残りますが、巡礼者として帽子にヤコブ貝をつけ、キリストのもとに行きます。巡礼の目的を果たしたので、巡礼者用の杖と水入れ（残念なことに中央祭壇上方に取り付けられたブロンズ製アーチのために隠れて見えません）がキリストの玉座の一段目に置かれています。目的地に達したので、それらはもう必要ではなくなったからです。

アルファとオメガの文字が記された肘掛けのある玉座に座すキリストは、この巡礼者を迎え入れ、背後の天使はシュロの枝を授けようとしています。シュロの枝は勝利のシンボルであり、かつ永遠の命のシンボルです。

しかし、キリストの視線と大きく広げられた腕はこの巡礼者に向けられているのではなく、この教会を訪れた人々に向けられています。それはキリストのところに来る人は誰でも招かれているということの意味をしています。

右側の画（「ウィーンはこの町の死者に敬意を払う」）

この絵はウィーンの町を擬人化して、ウィンドボナ（ウィーン市のラテン語名）を描いたものです。彼女は跪いて両手に新しく建てられた霊園教会を持ち、真ん中の絵に描かれたキリストに差し出しています。

ウィンドボナの隣にはかつてのウィーン市長カール・ルエーガー博士が立っています。後ろには天を仰いで手を合わせ、神がこの教会を快く受け入れてくれるようにと祈っているかのような天使が一人描かれています。

中央祭壇の上方に見えるラテン語の文字「EGO SUM RESURECTIO ET VITA」（ヨハネ福音書11章25節にあるイエスの言葉で、「私は復活であり、命である」と訳されます）は、この霊園教会が最も伝えたいことを要約しています。